

市原市市原条里制遺跡
(蛇崎八石地区)・仲山遺跡

2004

日本ユニシス株式会社
財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市は、市内を南北に貫流する養老川がもたらした肥沃な平野と、山間部の緑豊かな自然環境のなかにあり、先史からの多数の遺跡は、今日にいたる人びとの歩みを伝えてくれます。先人達の残した文化遺産である遺跡は、本来豊かな自然とともに、後世に伝え残すことが最善の選択であります。しかし、21世紀の活力ある市原市を創造していくためには、社会資本の整備もまた着々と整えていかなければなりません。

今回の発掘調査は、市内の2地点に計画された電波塔建設に伴って実施されました。建設計画の策定にあたっては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず2遺跡の一部について記録保存の措置が講じられることとなりました。

この報告書に所収したのは市原条里制遺跡と仲山遺跡です。市原条里制遺跡は、縄文時代の低地性貝塚や、弥生時代から中世の水田、古代の祭祀遺物など、注目すべき成果の多い低湿地遺跡です。今回、新たに低地性貝塚を検出できたことはとても大きな成果といえます。

仲山遺跡では、大きな成果を得ることができませんでした。弥生時代から古墳時代の集落が存在したことを追認することができました。

発掘調査によって得られた貴重な成果は、記録として将来に伝えると同時に、現在においても積極的に活用されなければなりません。市民の生涯学習意欲が年々高まりをみせるなか、本書の刊行を新たなステップとして、文化財の積極的な活用により一層心を砕いてまいりたいと考えております。

最後に、発掘調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、ご指導、ご尽力いただきました、千葉県教育庁文化財課、日本ユニシス株式会社、ユニアデックス株式会社、株式会社ダイヤアクセス、市原市教育委員会、並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成16年8月

財団法人市原市文化財センター
理事長 石川 剛

例 言

- 1 本報告書は、千葉県市原市菊間95-4・95-5に所在する市原条里制遺跡蛇崎八石地区および、市原市南岩崎686-9に所在する仲山遺跡の発掘調査報告書である。当センターの遺跡コードは、市原条里制遺跡蛇崎八石地区をセ385、仲山遺跡をセ386とした。
- 2 発掘調査は、無線基地局（市原局・南岩崎局）の建設にともない、日本ユニシス株式会社の委託を受け、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと、財団法人市原市文化財センターが実施した。
- 3 調査面積は以下のとおりである。
市原条里制遺跡 調査対象面積・上層本調査面積188m²
仲山遺跡 調査対象面積339m²。上層確認調査面積33m²、本調査64m²。
- 4 発掘調査、整理作業は、以下のとおりに行った。
発掘調査 平成16年4月6日～平成16年4月22日 担当 近藤敏
(市原条里制遺跡 本調査188m²)
平成16年4月19日～平成16年4月23日 担当 近藤敏
(仲山遺跡 確認調査33m²、本調査64m²)
整理作業 平成16年4月30日～平成16年6月11日 担当 近藤敏・西野雅人
(市原条里制遺跡)
平成16年6月14日～平成16年7月2日 担当 西野雅人
(仲山遺跡)
- 5 本書の執筆作成は西野雅人が行った。ただし、弥生土器・土師器について当センター櫻井敦史・大村直の協力を得た。また、動物遺存体の分析について千葉県立中央博物館 黒住耐二氏のご指導と、当センター鶴岡英一の協力を得た。
- 6 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。
第1図 市原市基本図2（1：10,000）昭和7年市原市作成
第8図 市原市基本図k-5（1：2,500）平成10年市原市作成
- 7 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。なお、座標は原則として世界測地系を示すが、日本測地系による場合は（日本）と示した。
- 8 本書に収録した出土遺物および記録類は、市原市教育委員会市原市埋蔵文化財調査センターで収蔵、保管している。

本文目次

序文	(1) 分析の方法	8
例言	(2) 植物	8
第1章 市原条里制遺跡(蛇崎八石地区)	(3) 魚類・哺乳類	8
1 調査経緯と概要	(4) 貝類	11
(1) 調査に至る経緯	4 まとめ	13
(2) 遺跡の立地と環境	第2章 仲山遺跡	
(3) 調査の概要と方法	1 調査経緯と概要	15
2 調査の成果	(1) 調査に至る経緯	15
(1) 土層と貝層	(2) 遺跡の立地と環境	15
(2) 出土遺物	(3) 調査の方法	17
(3) 水田遺構	2 調査の成果	17
(4) 上部貝層	3 まとめ	18
(5) 下部貝層	報告書抄録	巻末
3 動植物遺体		

挿図目次

市原条里制遺跡	仲山遺跡
第1図 市原条里制遺跡と周辺の地形	第7図 事業範囲と調査区
第2図 事業範囲と調査区	第8図 仲山遺跡と地形
第3図 調査区平面・断面	第9図 北側調査区
第4図 出土遺物	第10図 南側調査区
第5図 貝種組成	
第6図 貝類計測値分布	

表目次

第1表 縄文土器	第5表 貝類同定結果
第2表 土師器	第6表 貝種組成
第3表 貝サンプル	第7表 貝類計測値分布
第4表 貝類種名表	

写真図版目次

図版1 市原条里制遺跡：貝層断面(e-a) 貝層コラムサンプル 調査風景
図版2 仲山遺跡：南側調査区 001・002 北側調査区，市原条里制遺跡：上層調査終了，貝層検出加工木・竹 貝層調査状況 貝層断面(1)・(2)
図版3 市原条里制遺跡：縄文土器・土師器
図版4 市原条里制遺跡：植物遺体 動物骨 貝類

第1章 市原条里制遺跡（蛇崎八石地区）

1 調査経緯と概要

（1）調査に至る経緯

発掘調査は、市原市菊間字蛇崎八石における無線基地局の建設工事に先立って実施したものである。工事に先がけ、日本ユニシス株式会社より「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が、千葉県教育委員会および市原市教育委員会に提出された。これを受け、千葉県教育庁文化財課、市原市教育委員会ふるさと文化課、日本ユニシス株式会社の3者により協議が行われた結果、事業地内に所在する埋蔵文化財については、発掘調査による記録保存の措置がとられることとなった。発掘調査から報告書刊行については、財団法人市原市文化財センターが受託することとなった。

（2）遺跡の立地と環境

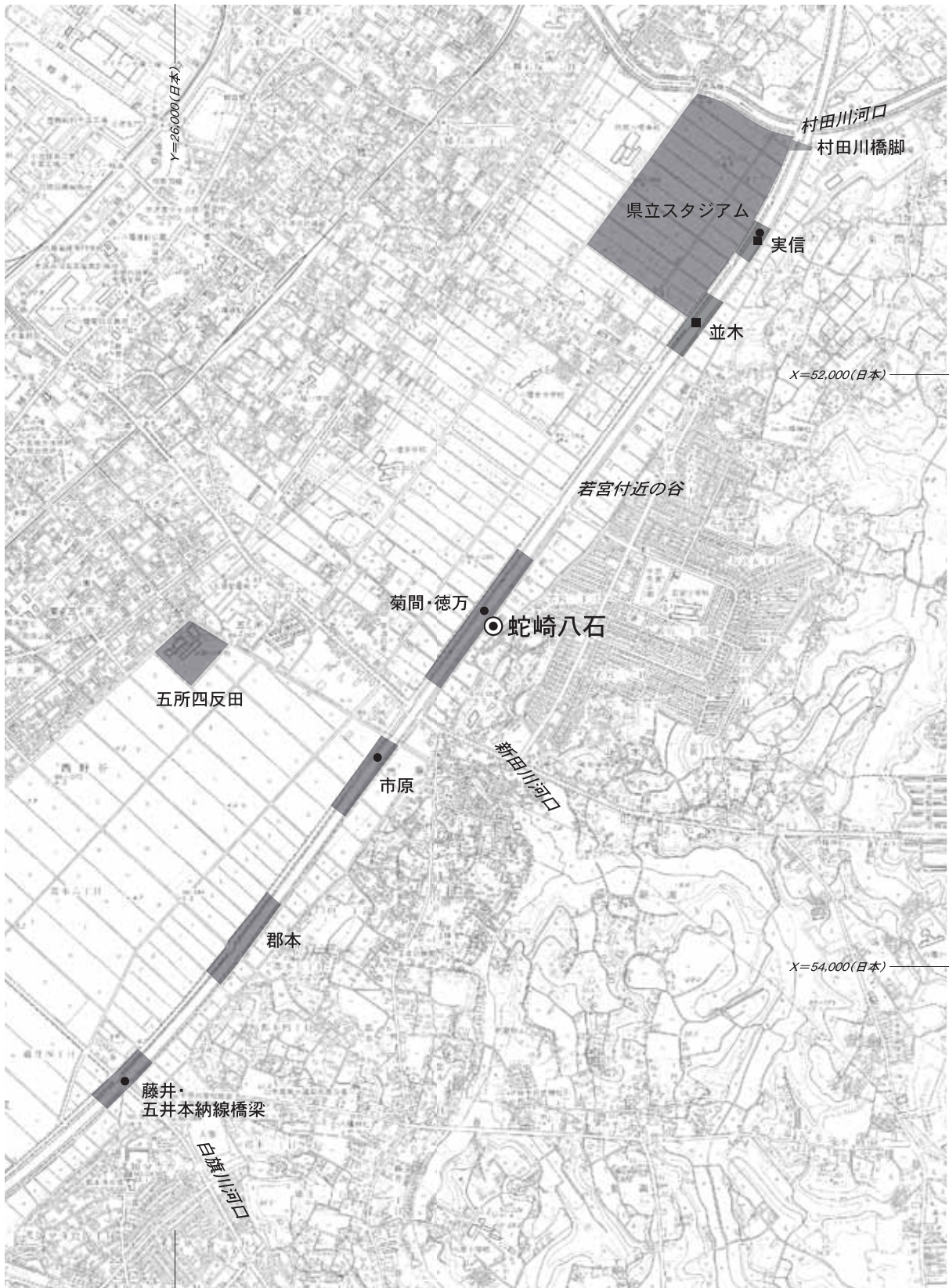
当遺跡の所在する市原市は、房総半島のほぼ中央部から東京湾岸にいたる南北約35kmの細長い市域をもち、その中央を養老川が貫流する。東京湾岸低地に接する台地のうち、養老川右岸から千葉市域境の村田川までの範囲を市原台地と呼んでいる。市原台地は、東京湾岸の低地をのぞむ北西―南東方向の海食崖でおわっている。遺跡は、新田川の北側の支台北端に突き出した白船城跡の西側、海食崖の直下に位置し、広大な海岸平野に続いている。標高は約6mである。

市原条里制遺跡は、この海食崖に平行して広がる海岸平野のうち、八幡・五井の市街地を乗せた砂堤群の東側の後背湿地部分を広く括った遺跡群であり、北は村田川左岸の八幡地区から南は加茂地区まで、長さ4.1km、幅0.9kmの範囲である（第1図）。

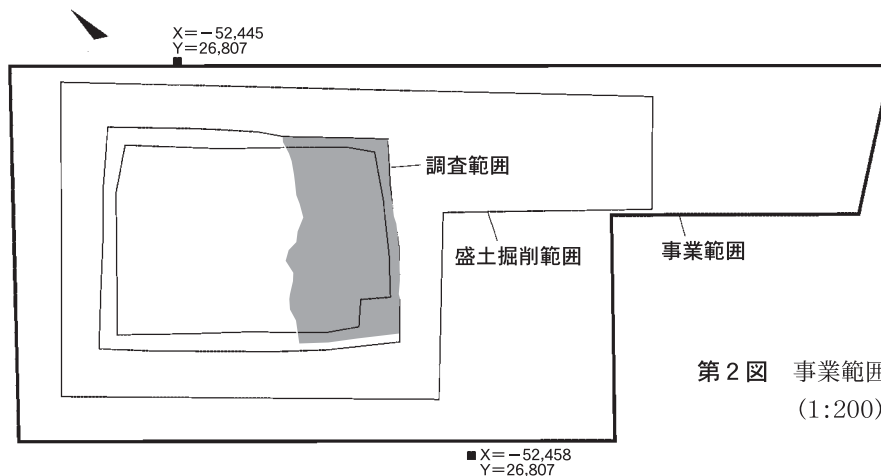
過去の調査例として、千葉県文化財センターによる館山自動車道の建設（小久貫他1999）、（仮称）県立スタジアムの建設に伴う広域の調査（佐藤・新田1997）がある。縄文時代早期・中期の低地性貝塚、弥生時代から中世以降に至る水田遺構、奈良・平安時代の古代官道跡などが検出され、木簡や農具を含む多量の木製品や建築部材、炭化米塊などが発見されている。当センターでも数か所において小規模な調査を実施しており、古代の水田遺構の検出、木製人形の出土などが特筆される。また、多量の木製農具が出土した「五所四反田遺跡」もまた、当遺跡群の一角にある。館山自動車道の調査以外は未報告であるが、遺跡概要の記載（大谷1998）や、県立スタジアムの調査概要（佐藤・新田1997）、水田遺構の記載（城田2002）、木製農具の報告・集成（小川1995、大谷2002）がある。なお、当遺跡は東京湾沿岸の古環境の変化と、遺跡の形成過程を知る上できわめて重要であるが、膨大なボーリングデータの分析等を含めて、この観点の調査・研究が立ち遅れている。

（3）調査の概要と方法

今回の調査地点は、当遺跡群の調査のなかで、もっとも陸側に位置し、海食崖の直下とあってよい。隣接した地点では弥生時代と古代の水田遺構が検出されており、その範囲を知ることが調査の目的のひとつとなった。本来は縄文時代の低地性貝塚の存在も確認したい地点であるが、期間や工事費の限界から、縄文時代の層準まで調査するのは困難と目されていた。砂質層を掘り下げると、壁の崩落が直ちに始まるからである。



第1図 市原条里制遺跡と周辺の地形 (1 : 20,000)



第2図 事業範囲と調査区
(1:200)

しかしながら、弥生時代から古代の水田遺構を想定した2面の精査において遺構が検出されなかったため一部を掘り下げたことにより、縄文時代の貝層と泥炭層を検出することができた。幸いなことに崩落しやすい砂質層が存在しなかったため、わずかな期間ではあったが貴重な成果を得ることができた。また、断面観察によって水田遺構らしい土層を確認した。

本調査は、電波塔の基礎が埋め込まれる部分を中心に、危険回避と、手掘り分の廃土を場内に置くことを考慮して、可能な限りの調査を行うことになった。休耕田上に盛られた1mの砂と0.1mの砂利を除去した(第2図の盛土掘削範囲)のち、調査範囲は一回り小さく、2段掘りとした。本調査範囲の掘削は、以下の順に行った。①第3図の土層断面で、①1・2層を機械掘削、②3層上面を精査後4層上面まで手掘りして精査、③西半分の5～7層を機械掘削、④8層上面を精査後9a層まで手掘り、貝層の上面を検出する、⑤貝層のある南東側の2/5くらいの範囲を手掘り、廃土は残りの3/5部分に盛り上げた。

貝層は、コラムサンプル(a)を1か所、南隅の水抜き穴部分(平面図の右上隅)で一括サンプルを1か所で採取した。そのほかについては、現地で約4mmメッシュの園芸用フルイにかけて、残存物を回収した。また、2か所で垂直方向に連続した5cm角の土壌サンプルを採取した。調査終盤に時間の余裕がある限り、貝層下を掘り下げたところ、泥炭層と下部貝層を検出した。精査する余裕はなく、土層断面の記録を行うに留め、埋め戻しを行った。

2 調査の成果

(1) 土層と貝層

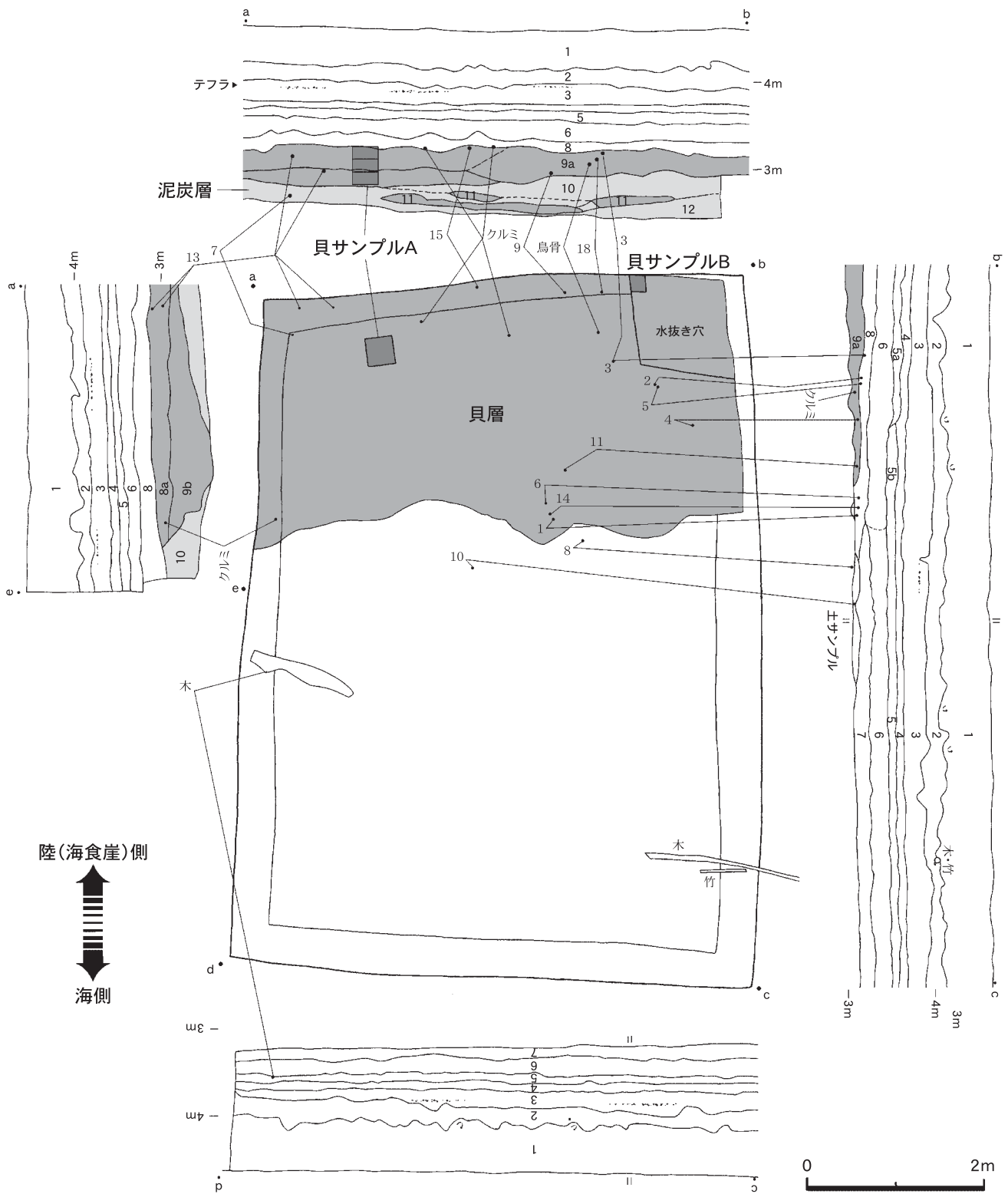
1層(暗褐色粘質土) 現世まで使用された耕作土である。中に宝永テフラが拡散している。下端では耕作による2層の巻上げが認められる。

2層(褐色木本泥炭) 筋状の黒色化した木片を多く含む。上層から加工痕をもつ木と潰れた竹が出土している。

3層(黒褐色マコモ泥炭) 土壌化が進んでいる。断面に図示したように、上位にフレイク状のスコリアがみられる。スコリアは、富士山を供給源とする5世紀末～6世紀初頭のものに似る。

4層(黒色土) 白色スコリアが散在し、土壌化が進んでいる。5a層の土壌化部分であろう。

5a層(暗灰色土) 赤色化したものを含む白色スコリアが散在する。5b層より一段低く、やや



第3図 調査区平面・断面 (1 : 60)

チョコレート色に近い粘質土であり、分層が可能であった。なお、e-a断面では分層できなかつた。白色スコリアを含む層は周囲の調査例から弥生中期の可能性が高い。ただし、3層、5層のスコリアについては未報告であり、当センター近藤敏の教示に寄った。

5 b層（暗灰色土） 5 a層より一段高まっている。断面の形状から、5 a層が水田、5 b層が畦畔の可能性はある。

6層（灰色粘土） 灰色から白灰色を呈す。b-c断面の破線より南東側では、木質遺体が多い。

7層（灰色砂質粘土） 北西側すなわち海側にのみ存在する。陸側では、貝層から8層がやや盛り上がり、7層はそれを海側に向かって水平に埋めるかたちである。

8層（黒色砂質土） 貝層を覆うように、陸側にのみ堆積する。貝は含まず、貝層との層界はきわめて明瞭である。

9 a層（混土破碎貝） 砂質灰色土層を含む混土貝層。残りの悪い破碎貝が中心である。9 b層とは内容の違いは少ないが、層界が線状に見える。

9 b層（混土貝） 黒色土を含む混土貝層。9 a層にくらべて貝の残りが良い。貝の体積状況や混土率など層内での変化が大きい、漸移的で分層は難しい。

10層（茶褐色マコモ・草本泥炭） 木根や木片を多量に含む。11層の下部貝層を挟む。上部貝層との層界は不明瞭で、漸移的である。

11層（破碎貝層） 下部貝層と呼称する。一部を掘り下げたもので、精査やサンプルの採取等は実施できていない。

12層（黒色有機土） 黒色ないし黒褐色で、分解の進んだ泥炭に由来するとみられる有機質土。

13層（黒灰色砂質土） 表面のみ検出した。

(2) 出土遺物

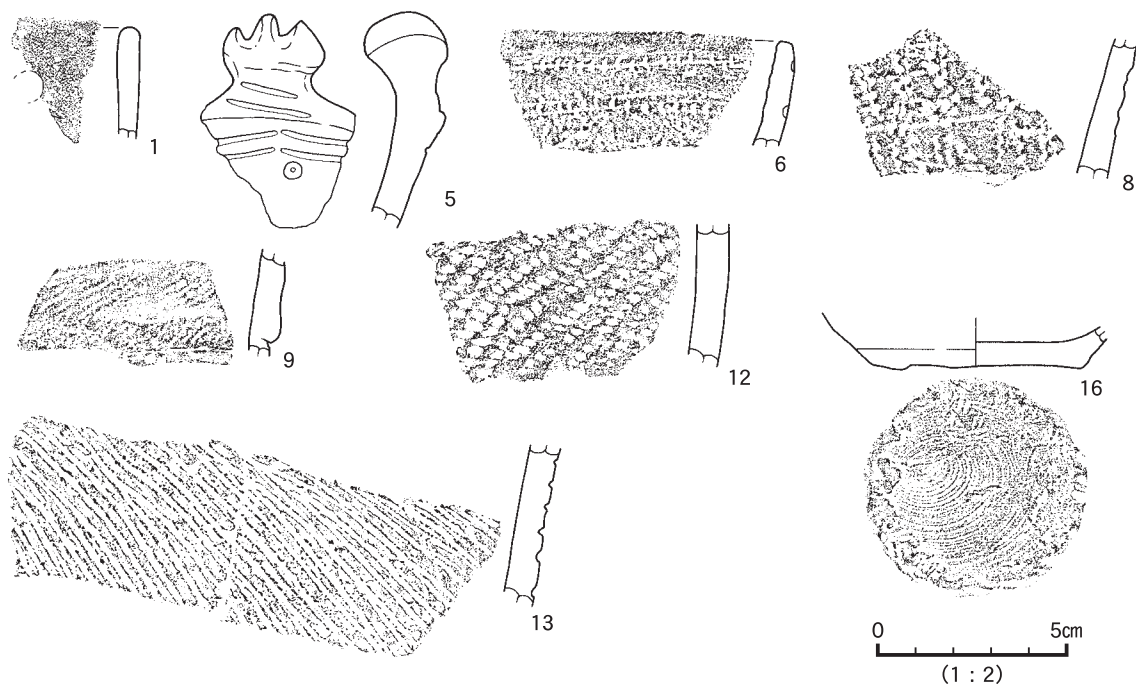
a. 縄文時代

大半は上部貝層付近で出土したものである。すべて低湿地出土資料に特有の灰色から黒灰色を帯びており、還元色化したものとみられる。小片のみとはいえ、低地貝層の小規模調査としては、出土数は決して少なくない。観察結果は第1表に示す。実測図（第4図）には一部の資料のみを掲載し、写真（図版3）には表に記載した資料全点を掲載した。

上部貝層上面（1～6, 8, 10, 14） 1～6は貝層上面から出土した。8, 10は直接貝層に接しておらず、10層上面から出土しているが、ほぼ1～6と同レベルであり、近い時期に堆積した可能性が高い。縄文土器の大部分が貝層上面付近から出土したといえる。これらの土器片は摩滅が著しい一方、現状では硬く、劣化が進行していないのが特徴である。水摩を受けた後に堆積した可能性が高く、貝層上面が水に洗われていたことを示すものであろう。ただし、8, 10, 14は他に比べて残りがよく、8, 10は出土レベルもわずかに低いので、上部貝層ないし10層中から出土した可能性もある。

1は縄文施文のような痕跡をもつもので、口縁部の特徴から撚糸文土器であろう。2～4は貝殻条痕文が施文され、胎土に繊維を含む早期後葉の土器である。5・6は諸磯式、8は浮島式土器である。10は断面カマボコ状の隆帯とハマグリ腹縁文が見られ阿玉台式後半、14は横方向の沈線で区画された無文部であり、中峠式～加曾利E式の頸部無文帯などが想定される。

上部貝層中（9, 11～13, 15） 貝層中から出土したものと判断されたのは5点である。9は全面が摩



第4図 出土遺物

滅した前期末～中期初頭の口縁部片である。外面に接合痕を残す。11～13はもっとも残りがよく、いずれも中期中葉・加曾利E式前半の土器とみられる。11はキャリパー形土器の波状口縁であろう。12は特徴が乏しいが、大きめの縦施文縄文や胴の張り具合、胎土の特徴から中期中葉の深鉢胴下半部と推定した。出土位置が不明となってしまったが、現地での「貝層中」との記載を尊重したい。13も難しいが、竹管内側による平行沈線を1本ずつ合わせながら重畳していく特長から曾利系土器すなわち加曾利E式前半の土器と推定した。15は時期を判断できないが、縄文施文の特徴から中期中葉の可能性はある。

なお、現地で採取されたクルミの核3点とカモ類の鳥口骨1点も貝層上面ないし貝層中から出土している。貝層に含まれる動物遺体については別に記載する。

上部貝層以下(7) 10c層から、劣化の進んだ前期後葉の土器片が1点(7)出土した。

非掲載資料は縄文土器小片4点と小礫6点である。なお、9層貝層とそれ以下11層までの泥炭層には多量の木質、炭化種子等の植物遺体を含んでいる。今回は本格的な抽出・分析を実施することができなかった。コラムサンプルから検出した資料の一部について写真のみを掲載しておく(図版4)。

b. 古代～中近世

その他(16) 第4図16は2層上面で出土した土師器杯底部である。底部に回転糸切りの痕跡をもち、その後調整されていない。中世カワラケにも似るが、平安時代の土器であろうか。内面には油煙の痕跡が認められる。縄文土器のような還元色化がみられない。2層は中世以降の耕土であり、紛れ込んだものと考えられる。この他に平面図・断面図に出土位置を示した加工木と竹(図版2)、広葉樹がある。加工木と竹は中世以降、広葉樹は古代の層から出土しているが、現時点では遺物の帰属時期を判断するのは困難である。なお、非掲載資料は土師器小片2点である。

(3) 水田遺構

第3図b-c断面にみられた5a層と5b層の形状から、5a層が水田、5b層が畦畔の可能性が

第1表 縄文土器

No.	図	位置	時期1	時期2	主要文様	文様, 成形・調整, 備考	出土層位	依存状況
1	○	004-0006	早期前葉	捺糸文	縄文?	口縁無文。補修孔	9層貝層上面	全面摩滅後, 1辺割れ
2		004-0009	早期後葉	条痕文	平行竹管文	沈線?内面条痕。繊維含む	9層貝層上面	全面摩滅
3		004-0002	早期後葉	条痕文	条痕文のみ	内外面条痕。繊維含む	9層貝層上面	全面摩滅
4		004-0011	早期後葉	条痕文	竹管文?	平行竹管文?表面剥離。内面条痕	9層~10層上面	全面摩滅
5	○	004-0001	前期後葉	諸磯 b	竹管意匠文	円形刺突。刻まれた円形突起。波状口縁	9層貝層上面	全面摩滅
6	○	004-0004	前期後葉	諸磯 b	平行沈線+連続刺突文	口縁部文様帯以下に縄文。	9層貝層上面	全面摩滅, 内面劣化・剥離後安定
7		004-0022	前期後葉	諸磯?	平行沈線+押引文?	ハの字の押引か?	10c層	全面摩滅顕著
8	○	004-0007	前期後葉	浮島	波状貝殻文	フネガイ科腹縁文	10層	残り良い
9	○	004-0020	前期末~中期初頭	—	縄文のみ	無節L。板状に接合, 外面接合痕跡残す	9a層貝層中	全面摩滅
10		004-0012	中期前葉	阿玉台後半	隆帯	断面カマボコ状隆帯, タテの連続刺突文。雲母多い。	10層上面	やや摩滅
11		004-0003	中期中葉	加曾利E前半	隆帯	内湾する口縁に高い隆帯, キャリパー形	9層貝層上面	やや摩滅
12	○	004-0021	中期中葉	加曾利E前半	縄文のみ	RLタテ。雲母砂粒多。内面入念なナデ	「貝層中」現地記載。ドット漏れ	良好
13	○	004-0015, 19	中期中葉	加曾利E前半	集合沈線	平行沈線を斜めに重畳, 曾利系か。内面入念なナデ	9a層貝層中	良好
14		004-0005	不明	—	沈線のみ	横区画沈線。外面入念なナデ, 内面粗いナデ。細砂粒多。中・後期か?	9層貝層上面	良好
15		004-0014	不明	—	縄文のみ	RLタテ。中期か?	9a層貝層中	良好だが, 内面剥離

第2表 土師器

No.	図	位置	時期1	時期2	観察事項	出土層位	依存状況
1	○	全体-0002	平安		ロクロ土師器。内外面ロクロナデ, 底部糸切り。内面に油煙, 灯明具に転用?	中世耕土直下, 2層泥炭上面	良好

ある。5 a 層に含まれるスコリアから弥生時代中期の可能性を指摘したが、隣接する市原条里制遺跡菊間・徳万地区では、奈良・平安時代の条里地割の水田が検出されたのみである。残念ながら、今回の調査区で観察された層序と、菊間・徳万地区の基本層序と対比するのは困難であった。また、弥生時代の水田遺構が検出された県立スタジアム地区・並木地区の基本層序にも対比できない。共伴遺物もなく、現時点では水田遺構の時期を積極的に言える段階にない。

(4) 上部貝層

5.4m×3.0mの範囲で貝層を検出した。層厚は調査区北側で最大70cmを測り、南や西に向かって薄くなる。調査区外、北側に向かってかなり続く可能性が高く、さらに厚さを増していくことも考えられる。一方南東の陸側に向かっては、それほど続きそうもない。9 a 層は土の割合が多く、混貝土層に近い。貝はすべて破砕貝で残りが悪い。9 b 層はやや貝の残りがよく、完形のハマグリが目立つが、低地貝層に特有の灰白色化したものである。鉄分の付着は少ない。9 a 層・9 b 層とも貝殻の堆積は方向が不揃いで貝種等の層位的なまとまりが認められない。また、土や泥炭と混じりあっている。したがって、廃棄に由来するとしても2次的小おそらく水の影響も受けながら再堆積したものと考えられる。

低地の貝層が人為的なものか自然に堆積したものであるかは、一般に判断が難しい。本例も同様であり、このあとの貝サンプルの分析によって検討を行ったところ、人為的に廃棄された貝と自然に堆

積した貝が混じっているものと推定された。堆積の時期については、わずかな点数ながらもっとも残りの良い土器片が貝層中から出土しており、時期も揃っていることから中期中葉の可能性が高い。摩滅の著しいものを除くと、貝層よりやや低い部分から出土した可能性の高い土器（8・10）が前期、中期前半である点もこの推定に合う。

（5）下部貝層

調査終了間際に検出したものであり、精査やサンプル採取の余裕がなく、範囲や貝層の内容などは不明である。掲載できた記録はa－b断面が全てである。貝層中からの出土遺物はない。10層の中位から出土した縄文土器7は、下部貝層の堆積した時期に埋まった可能性があるが、摩滅の著しい前期の土器であり、貝層の時期を知る手がかりにはならない。

3 動植物遺体

（1）分析の方法

上部貝層についてコラムサンプル（貝サンプルa）を1か所、南隅の水抜き穴部分（平面図の右上隅）で一括サンプルを1か所（b）採取した。そのほか、上部貝層の一部について現地で約4mmメッシュの園芸用フルイをかけ、残存物を回収した（第2表）。下部貝層及び、貝層下の泥炭層などについては採取の余裕がなかった。当報告ではコラムサンプルのみを分析対象とし、以下の作業を行った。水洗は10mm・4mm・1mmメッシュの試験フルイを使い、乾燥後の抽出では1mmのみ半分の量を任意に選んで行った。検出資料のうち、植物・貝類・魚類・哺乳類の遺体について記載を行った。なお、貝類については1mmにも多量の資料が入っているため、乾燥した状態で2mmのフルイを使って2mmと1mmの試料に分離した。抽出はすべて終えたが、同定・分析は2mmまでにとどまった。この他カシパン類、塊状の灰、小礫、軽石が混じっていた。なお、魚類・哺乳類の同定は金子浩昌氏の協力を得て鶴岡英一が、貝類の同定は千葉県立中央博物館 黒住耐二氏と西野が行った。

（2）植物

特徴のある資料を選んで一部を撮影した（図版上）。クルミ核とドングリの殻斗が目立つ。今回は回収できなかったが、上部貝層と下部貝層の間の泥炭層にも多くの植物遺体が入っていた。

（3）魚類・哺乳類

サンプルから検出したエイ類、キス属、アジ科、アユ、タヌキの骨、現地で採取されたカモ類の骨がある（図版3中）。いずれも中期の貝層（9層）から出土したものであるが、単独の存在であり、評価は難しい。

第3表 貝サンプル

サンプル名	カット No.	前重量 *(kg)	水洗後重量(kg)				混土率 (%)	分析実施	備考
			10mm	4mm	1mm	合計			
貝サンプルA	1	26.9	2.9	2.1	1.9	6.9	74.3	済み (1mmは 半分のみ)	9a・9b層から30×30×厚さ14cmのコラムサンプルを3カット採取
	2	31.6	2.2	2.5	2.1	6.8	78.5		
	3	32.5	1.4	1.2	1.7	4.3	86.8		
貝サンプルB		32.3	2.0	2.2	2.5	6.7	79.3	未了	南隅の水抜き穴掘削時に貝層部分を20×20cmの範囲で採集
現地水洗済 貝サンプル		—	13.8	11.7	9.2	34.7	—	未了	現地で園芸フルイを使い水洗し、フルイ上の残存物を保管

*水洗前重量。乾燥を行わずに実施したため、かなりの水分を含む。水洗後重量は乾燥後行った。

第4表 貝類種名表

腹足綱 GASTROPODA			イトカケガイ科	カゴメイトカケギリ類	sp.
ユキノカサガイ科	ツボミガイ	<i>Patelloida pygmaea form conulus</i>	オオシノミガイ科	ムラクモキジビキガイ	<i>Japanacteon nipponensis</i>
ニシキウズガイ科	イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i>	オカミミガイ科	クリイロコミミ	<i>Laemodonta siamensis</i>
リュウテンササエ科	スガイ(フタ)	<i>Lunella coreensis (operculum)</i>		キヌカツギハマシノミガイ	<i>Melampus (Micromelampus) sincaporensis</i>
アマオブネガイ科	ヒロクチカノコガイ	<i>Dostia violacea</i>	二枚貝綱 BIVALVIA		
	イシマキガイ	<i>Clithon (Clithon) retropictus</i>	イタボガキ科	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
タマキビガイ科	タマキビ	<i>Littorina brevicula</i>	チドリマスオ科	クチバガイ	<i>Coecella chinensis</i>
カワザンショウガイ科	カワザンショウガイ	<i>Assiminea japonica</i>	バカガイ科	シオフキガイ	<i>Maetra quadrangularis</i>
	クリイロカワザンショウ	<i>Angustassiminea castanea</i>	ニッコウガイ科	ユウシオガイ	<i>Moerella rutila</i>
クビキレガイ科	キュウシュウクビキレガイ	<i>Truncatella pfeifferi form pfeifferi</i>	マテガイ科	マテガイ	<i>Solen strictus</i>
カワグチツボ科	ワカウラツボ	<i>Iravadia (Fairbankia) sakaguchii</i>	マルスダレガイ科	ヒメカノコアサリ	<i>Veremolpa micra</i>
ウミナナ科	ウミナナ科**	Potamididae spp.		カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>
タマガイ科	ツメタガイ	<i>Glassaulax didyma</i>		アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
アッキガイ科	アカニシ	<i>Rapana venosa</i>		ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
	カゴメガイ	<i>Bedevea birileffi</i>		ハナグモリ	<i>Glaucanome chinensis</i>
ムシロガイ科	アラムシロガイ	<i>Reticumassa festiva</i>	オオノガイ科	オオノガイ	<i>Mya arenaria oonogai</i>
	ムシロガイ	<i>Niotha livescens</i>	クチベニガイ科	ヌマコダキ	<i>Potamocorbula amurensis</i>
			合計	23科	32種

第5表 貝類同定結果

種名	cut1/ 10mm	cut1 /4mm	cut1 /2mm	cut2 /10mm	cut2 /4mm	cut2 /2mm	cut3 /10mm	cut3 /4mm	cut3 /2mm
腹 ツボミガイ		7			37	19			6
足 イボキサゴ	14	2027	1348	43	4127	2506	51	2132	1927
綱 スガイ		1	3		8	18	1	5	16
				1					
				20	30		2	1	
					4				
		18	114		647				
			16		2	99			
			5		4				
						1			
						1			
	44	765	399	77	3196	1564	10	240	86
	5			24	3		1		
		1		4			1		
								1	
				2	1				
		2			21			2	
			1						
									4
					4				
					2				
						1			
二 マガキ	L	2	4	24	30	4	3	5	
枚 R		3	3	13	7		6	3	
貝 クチバガイ	L			2		1			
綱 R				2	2	2			
	L	13	36	2	59	132	3	8	
	R	9	28	1	63	102	5	8	
	L					3			
	R			1	2				
	L	1	1	2	1				
	R		1		2				
	L	6							
	R	5							
	L				1		1		
	R	1			1		1		
	L	6		7			1	1	
	R	5		5			1		
	L	474	153	8	222	178	80	25	1
	R	475	153	10	245	162	64	27	4
	L					1			
	R					1			
	L								
	R		1						
	L		5						
	R		1						

2mmは採取量の約半分のみを抽出対象とした。

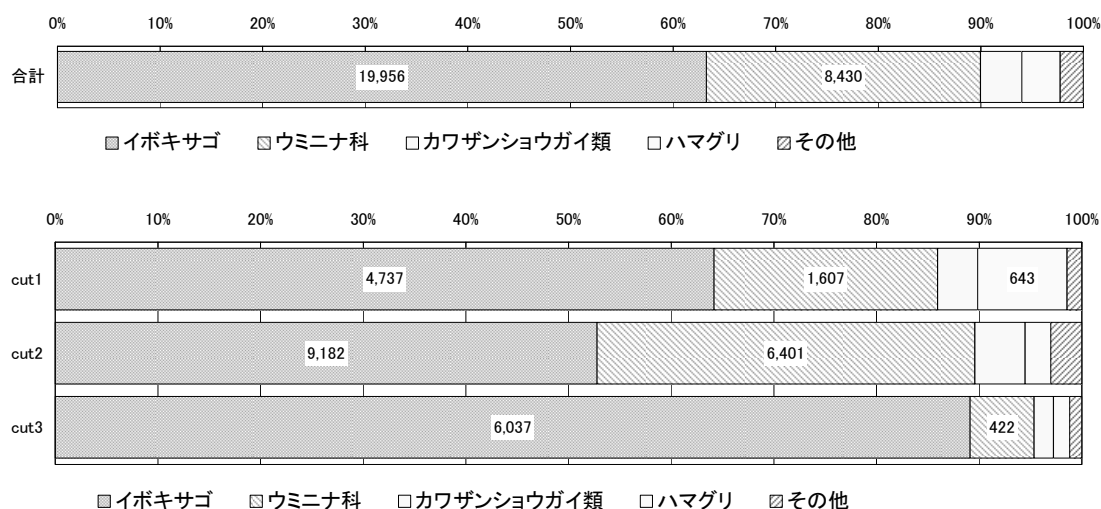
第6表 貝種組成

種名	cut1	cut2	cut3	合計	%	遺存	年齢構成	生息1	生息2
主要種									
イボキサゴ	4,737	9,182	6,037	19,956	63.3%	不良	成体	内湾砂底	潮間帯
ウミナナ科	1,607	6,401	422	8,430	26.7%	良	幼～成貝	湾奥干潟	潮間帯～潮間帯上部
カワザンショウガイ類	288	851	128	1,267	4.0%	良	幼～成貝	汽水泥底	アシ原の泥上
ハマグリ	643	434	107	1,184	3.8%	不良	成貝	内湾砂底	潮間帯～20m
その他	106	527	80	713	2.3%				
合計	7,381	17,395	6,774	31,550	100.0%				

その他の内訳

大別	種名	cut1	cut2	cut3	合計	%	遺存	年齢構成	生息1	生息2
汽水	イシマキガイ	2	50	3	55	7.7%	良	幼～成貝	淡水～汽水	河川～河口
	ヌマコダキ	5			5	0.7%	良	成貝	汽水泥底	汽水の沼
	ワカウツボ		2		2	0.3%	良	幼貝	汽水泥底	感潮域
	クリイロコミ		2		2	0.3%	良	幼～成貝	内湾潮上帯	アシ原の泥上
	キヌカツギハマシイノミガイ		2		2	0.3%	良	成体	内湾潮上帯	アシ原の泥上
	ヒロクチカノコガイ		1		1	0.1%	不良	幼～成貝	汽水泥底	感潮域
湾奥干潟	スガイ(フタ)	7	44	38	89	12.5%	良	幼～成貝	湾奥干潟	マガキに付着
	マガキ	6	62	8	76	10.7%	良	幼貝	湾奥砂泥底	潮間帯上部
	タマキビ		4		4	0.6%	良	成貝	湾奥干潟	マガキに付着
内湾干潟	シオフキ	53	193	11	257	36.0%	不良	成貝	内湾砂底	潮間帯～20m
	ツボミガイ	7	75	12	94	13.2%	良	成貝	内湾砂底	ウミナナ科に付着
	ツメタガイ	5	27	1	33	4.6%	不良	成貝	内湾砂底	潮間帯～10m
	アラムシロ	2	21	2	25	3.5%	不良	成貝	内湾砂礫～砂泥	潮間帯
	アサリ	6	7	2	15	2.1%	不良	成貝	内湾砂底	潮間帯～20m
	クチバガイ		8		8	1.1%		成貝	砂礫底	潮間帯上部
	アカニシ	1	4	1	6	0.8%	不良	成貝	内湾砂泥底	潮間帯～30m
	ヒメカノコアサリ	6			6	0.8%	良	成貝	内湾砂底	潮間帯～20m
	マテガイ	2	3		5	0.7%	不良	成貝	内湾砂底	潮間帯
	ムシロガイ		3		3	0.4%	不良	成貝	内・外砂泥底	潮間帯～20m
	ユウシオガイ		3		3	0.4%	良	成貝	砂泥底	潮間帯
	カガミガイ	1	1	1	3	0.4%	不良	成貝	内湾砂底、砂礫底	潮間帯～60m
	キュウシュウクビキレガイ		2		2	0.3%	良	成貝	飛沫帯のゴミの間	潮間帯上部
	ハナグモリ		1		1	0.1%	不良	成貝	内湾泥底	潮間帯
	オオノガイ	1			1	0.1%	良	幼貝	砂泥底に深く潜行	潮間帯
沖城	カゴメイトカケギリ類	2	8		10	1.4%	良	成貝	砂泥底	200～450m
	ムラクモキジビキガイ		4		4	0.6%	良	幼貝	砂底	潮間帯下部～30m
	カゴメガイ			1	1	0.1%	良	成貝	砂礫底	5～20m

・合計：2mmフルイは半分のみ抽出したため、10mm+4mm+(2mm×2)とした。



第5図 貝種組成

(4) 貝類

1 mm試料の分析を終えていない段階であるが、23科33種以上を同定した(第4表)。

a. 貝種組成

第5表に同定結果を示す。すでに述べたように今回は1 mmフルイの試料については半分のみ分析対象とし、さらに乾燥した状態で2 mmフルイに残るものだけを抽出した。1 mmにも多量の微小貝が混じっているが、整理作業期間の限界から断念した。これについては今後別の機会にデータを提示したい。したがって、今回のデータは暫定的なものである。

第6表と第5図に貝種組成を示す。2 mmフルイについては半分の試料の数値であるため、2倍してカットごとの合計を示したものである。ただし、通常の報告では、主に食用と考えられる種と、いわゆる「微小貝」のように現地性の種を別に提示する。しかし、今回の試料ではウミナ類のように主要種のなかに2つに区別できないものがあり、また、食用種と微小貝の組成自体が重要であると考えたことから合わせたデータを提示した。

主要種の組成 合計で見ると、イボキサゴとウミナ類が9割を占め、これにカワザンショウガイ類とハマグリを加えた4種が主要種となっている。cutごとにみると、cut 3ではイボキサゴが9割近くを占めるのに対して、cut 2ではウミナ類の割合がかなり増えるcut 1ではややイボキサゴの割合が増え、ハマグリも比較的多い。イボキサゴとハマグリは東京湾内湾域で縄文時代以降もっとも重要視された2種である。貝層の推定形成時期である縄文中期の貝塚では、イボキサゴが個体数で9割以上を占め、ハマグリがこれに次ぐのが一般的である。一方、ウミナ類はイボキサゴ漁で混獲されて、イボキサゴの数%混じるのが一般的である。当試料では主要種のひとつであり、しかも稚貝から成貝まで漸移的に存在する点で貝塚のあり方とは明らかに異なっている。なお、種レベルの同定は厳密には難しく終えていないが、1割程度がヘナタリ、フトヘナタリが若干あり、そのほかの大半はウミナのようなようである。カワザンショウガイ類は汽水域のアシ原などに生息する微小な巻貝である。

これらの4種のうち、イボキサゴとハマグリはほぼ全点が破片であるのに対して、ウミナ類とカワザンショウガイは殻の残りが良い。後者は現地または近くに生息していた可能性が高く、イボキサゴとハマグリはこれとは別の由来で堆積したものと考えられる。

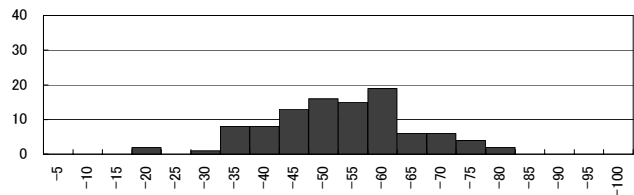
主要種以外の組成 第6表に示したおもな生息環境をみると、河川や汽水域、内湾干潟、沖域など比較的ばらつきがある。シオフキ、ツメタガイ、アラムシロ、アサリはイボキサゴ・ハマグリと同一の環境に多く、貝塚でも普通にみられる。ツボミガイはウミナに付着していたものとみられる。マガキはこれらと同一の水域からより湾奥の泥底干潟に多く、スガイとタマキビもマガキの多い貝塚でみられる。イシマキガイは河川の淡水域から河口の汽水域に棲む。このほかの種は個体数が少ないが、汽水域から内湾干潟の小形の貝類に残りの良いものが目立つ。

b. 計測値

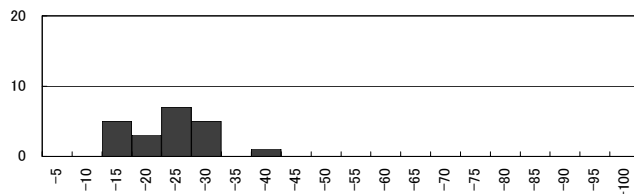
第7表、第6図にハマグリ、マガキの計測値を示す。全体に残りが悪く計測可能な個体が少なかった。ハマグリは久保の方法(久保1988)にしたがい楕面長を計測して復原値を求めた。式は殻長=楕面長 $\times 2.8 + 1.4$ である。この式は比較的大形の個体中心の計測値をもとにしたものであり、今回小形の個体中心の貝層試料(西広貝塚の後期前葉・堀之内1式期貝層、608号住居跡)29点で追認したところ、殻長=楕面長 $\times 2.99 + 1.4$ (ただし切片は1.4とした)の式を得た。楕面の計測点の認識も、とく

ハマグリ 殻長		マガキ最大長	
殻長mm	CUT2左殻	殻長mm	CUT2
-15.0		-15.0	5
-20.0	2	-20.0	3
-25.0		-25.0	7
-30.0	1	-30.0	5
-35.0	8	-35.0	
-40.0	8	-40.0	1
-45.0	13	-45.0	
-50.0	16	-50.0	
-55.0	15	-55.0	
-60.0	19	-60.0	
-65.0	6	-65.0	
-70.0	6	-70.0	
-75.0	4	-75.0	
-80.0	2	-80.0	
試料数	100	試料数	21
平均	50.37	平均	21.11
標準偏差	12.18	標準偏差	6.66

ハマグリ



マガキ



第7表・第6図 貝類計測値分布

に小さな個体では難しく、なお検討を要する。

ハマグリのサイズは都川・村田川に比べて明らかに大きい。これは低地型の貝塚の特徴を示している可能性がある。しかし、現在のところ、台地上に立地する養老川水系の中期貝塚のデータがないため、ひとまず保留しておきたい。マガキは幼貝ばかりである。ウミナナ類についても計測を行ったが、抽出の終わっていない1mmにも入っていることから今回は提示を見送ることにした。これ以外の種については、計測を実施していないが、成貝と幼貝のどちらが主体であるかの傾向を大まかに観察し、第6表に示した。

c. 貝類の特徴からみた貝層の性格

繰り返しになるが、低地の貝層が人為的なものか自然に堆積したものであるかの判断は、とても難しい。サンプルの分析結果をみると、少なくとも、現地性で自然堆積した貝と、人為的または水の営為により運ばれた貝の両方が存在するものと考えられる。前者と後者では貝殻の遺存状態に著しい違いが認められるからである(第6表の遺存欄)。前者を代表するのはアシ原・泥干潟の指標となるカワザンショウ類であり、水洗前にも残りがよく若干色も残る個体が多量に混じっているのがわかった。これに対して、後者を代表するのは内湾砂底種のイボキサゴとハマグリである。完形の個体はなく、劣化、白色化、細片化が著しい。この貝層が泥混じりであったことからすれば、イボキサゴとハマグリが現地性である可能性は考えにくく、人為的な貝層(貝塚)であるとみるのが妥当と思われる。

しかし、状況を複雑にしているのはウミナナ類の存在と、残りのよい小形の貝のなかに内湾砂底種や湾奥干潟種などが混じることである。ウミナナ類はウミナナが主体であり、稚貝から幼貝がきわめて多く、比較的残りが良い。大半が現地性であったとすると、カワザンショウガイと同じ河口のアシ原だけでは考えにくい。砂底干潟まで拡大する必要があるとみられる。「現地性」とはいえ、少なからず水により運ばれて堆積した可能性が高い。この点は、ハマグリ・イボキサゴと混じり合った産状にも調和する。ただし、ある程度時間的な幅があって、環境に変化があったことも充分考えられる。貝層形成時の環境は、周辺に河口のアシ原や内湾干潟が存在したことは疑いないが、より詳細な記載をするには、1mmフルイの試料についても分析をすすめる必要がある。また、貝サンプルは工程上の都

合から貝層部分で採取するのが精一杯であった。今後の調査で貝層下，貝層上にかけて連続した変化を確認すれば，より具体的な復元が可能になるはずである。

4. まとめ

今回の調査の最大の成果は，縄文中期中葉の貝層を検出したことにある。いまのところ，上部貝層は現地性の貝と廃棄された貝が混じり合っているものと考えられた。このような小規模な貝層の存在は，以前から予想されていたものである。諸事情により本調査対象から除外されたが，並木地区の貝層の一部は人為的な貝層である可能性が高く，貝層は点在する可能性があるとされていた(小久貫1999, 366p.)。また，県立スタジアム地区の調査を実見したところによれば，中期中葉の土器とイボキサゴ・ハマグリを中心とした貝殻は広範囲に延々と広がっており，本来存在したこの時期の低地性貝塚の貝が流失した可能性が高いと推定された。今回の結果は，これらの予想・推定をつよく支持するものである。

中期中葉は，長期にわたる通年定住型の生産・居住様式が発達して大型貝塚が形成された時期にあたる。当地域の縄文人は，堅果類や根茎類，イノシシ・シカを中心とした森林資源，小魚・イボキサゴ・ハマグリを中心とした海産資源など，あらゆる食材をバランスよく活かしていたらしい。ただし，貝類ではイボキサゴとハマグリ，堅果類ではコナラ等，根茎類など，継続的・計画的に安定して得られるいくつかの食材につよく依存していた可能性が高い(西野1999)。当遺跡は，小魚の網漁とイボキサゴ・ハマグリ漁が行われた漁場に隣接していた可能性が高く，低地性貝塚の存在はきわめて興味深い。ハマグリのサイズは台地上の大型貝塚に比べてかなり大きい印象であり，これが漁場に隣接した貝の利用・処理の特徴を示すものであるかどうかなど，今後追究していきたい。1mmメッシュ上の貝類の分析が未了であり，本貝層の性格についてはさらに検討を重ねた上で，別稿を用意したい。

さらに，植物遺体を多数含んでいる点も貴重である。今回は分析鑑定が未了であるが，クルミの核やドングリ類の殻斗が多く，上記の主要な植物食を含む実物資料として，植生復原の試料としてさらに広域でのサンプル採取が望まれる。

下部貝層と泥炭を含む層については，一部を掘り下げて存在を確認することが精一杯であったが，やはり注目に値する。並木地区や実信地区の状況をみると，早・前期を中心とした貝層と泥炭を含む層がさらに何枚か互層している可能性が高い。貝層は自然貝層が主体とされているが，かなりの土器を含んでおり，なお検討が必要であろう。

また，当時の海岸地形の変化自体も，縄文人の活動を知る上できわめて重要である。これまでに，市原条里制遺跡(群)のなかで基本土層として使われているものは，地点ごとに大きな混乱がある。緻密に行われた膨大なボーリングデータや試掘データを使った広域での層序の繋ぎあわせ，年代測定や出土遺物，鍵層を使った時期決定などの作業は，この遺跡群にとってもっとも重要で早急な課題であろう。そうした作業が行われた上で，各地点の形成過程や遺構の時期決定を再検討しなければ，今回のような小規模な調査の成果を活かすのは難しい。

文 献

- 大谷弘幸 1998 「市原条里制遺跡」 『千葉県の歴史 資料編考古3 (奈良・平安時代)』 千葉県
- 大谷弘幸 2002 「木製農耕具の変遷と若干の問題」『研究紀要23』 千葉県文化財センター
- 小川浩一 1995 「五所四反田遺跡検出の木製農耕具について」『研究紀要Ⅲ』 市原市文化財センター
- 小久貫隆他 1999 『市原市市原条里制遺跡』 千葉県文化財センター
- 佐藤隆・新田浩三 1997 「市原条里制遺跡(県立スタジアム)の調査成果—大規模低湿地遺跡の調査方法の検討—」 研究連絡誌49 千葉県文化財センター
- 城田義友 2002 「農耕関連遺構の分析」『研究紀要23』 千葉県文化財センター
- 西野雅人 1999 「縄文中期の大型貝塚と生産活動—千葉市有吉北貝塚の分析結果—」『研究紀要19』

第2章 仲山遺跡

1 調査経緯と概要

(1) 調査に至る経緯

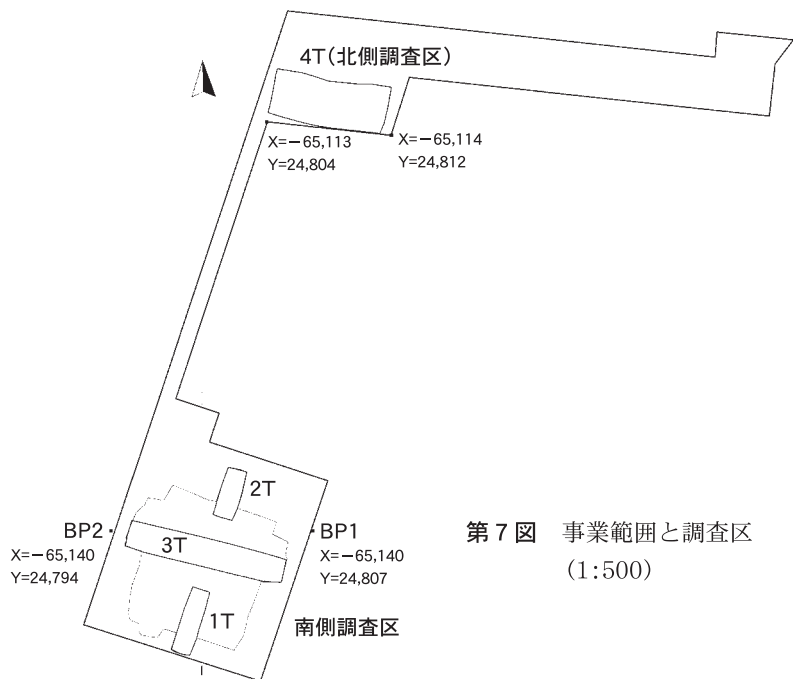
発掘調査は、市原市南岩崎における無線基地局の建設工事に先立って実施したものである。市原条里制遺跡と同様に事前照会、3者協議が行われた結果、発掘調査による記録保存の措置がとられることとなり、発掘調査から報告書刊行を財団法人市原市文化財センターが受託することとなった。

(2) 遺跡の立地と環境

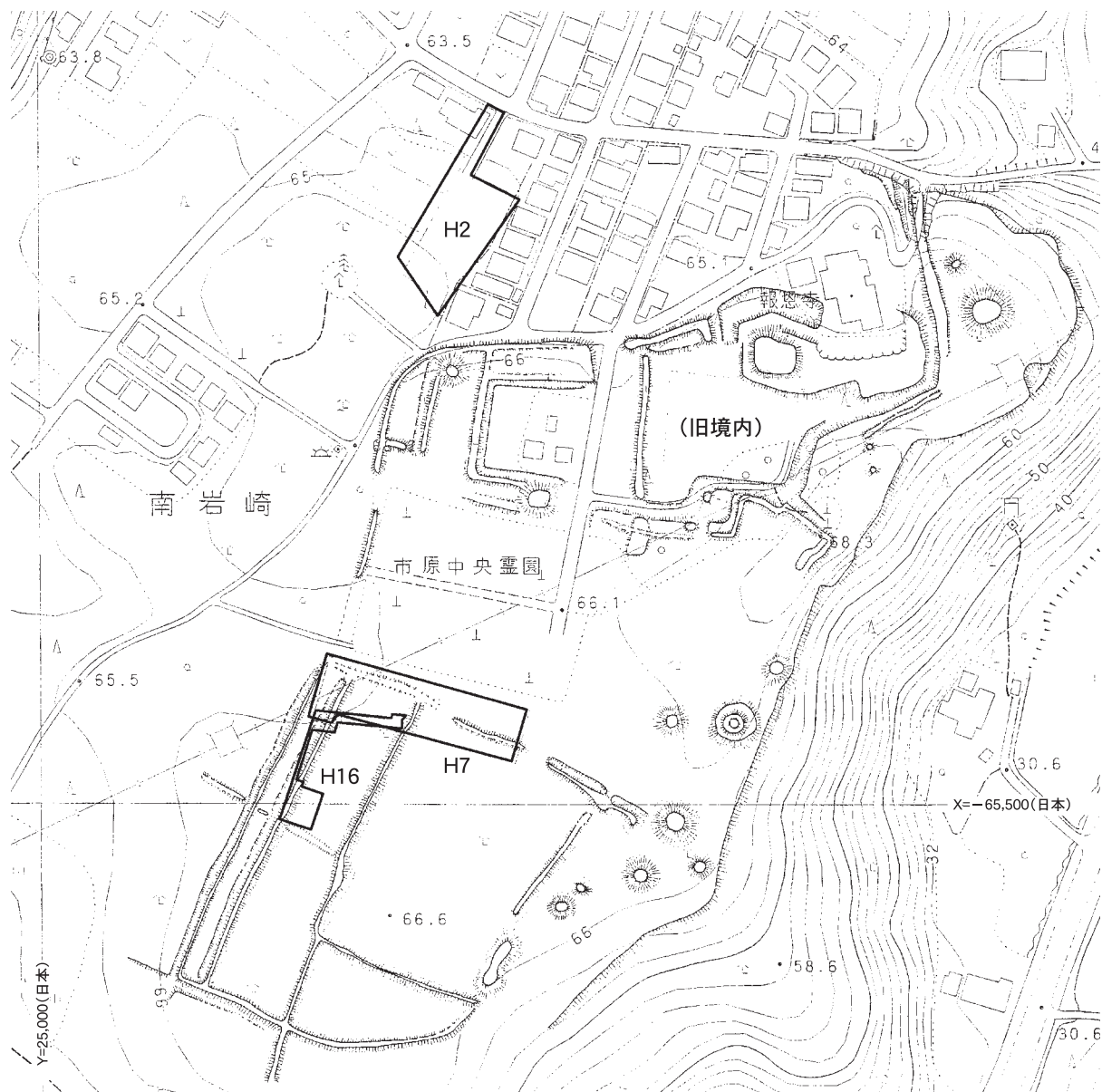
市原市南岩崎は、養老川低地の中流左岸にあり、支流である戸田川の谷口にもあたる。戸田川は、小櫃川水系の武田川谷との分水嶺である木更津市真里谷付近から流れ、南岩崎で養老川低地に至る。遺跡は養老川低地に突き出た台地上にある。

仲山遺跡は、集落・包蔵地であるほかに、報恩寺古墳群、中世の南岩崎砦としても登録されている。過去の調査例として、弥生後期の住居跡1軒などを検出した平成2年の「南岩崎多田良遺跡」(忍澤1991)、7世紀の方墳1基、中世溝・道路跡などを検出した平成7年の「南岩崎仲山遺跡」(櫻井1996)がある。遺跡の現状は大半が報恩寺境内と市原中央霊園およびその周辺林となっている。台地上には弥生後期から古墳時代の土器が比較的密に散布しているほか、第8図の縄張り図(櫻井1996)のように、台地上を方形・長方形に区画する土手や溝が多数、現地表面に現れている。北側の区画は報恩寺の旧境内に関わるものが中心と思われる。一方、南側の区画は、平成2年に検出した中世の溝・道路跡に全くあっておらず、砦跡に伴うものとは考えにくい。時期・性格は不明であるが、近世以降のものと考えられている。

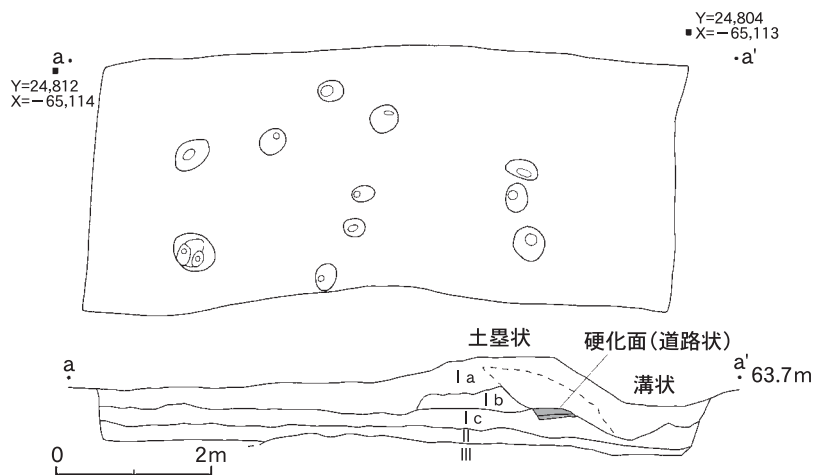
東側の戸田川谷を挟んだ位置には南岩崎遺跡(遺跡群)があり、平成11年度以降の調査で弥生後期から古墳時代後期の住居跡を多数検出している。弥生後期の集落には、V字溝と方形周溝墓を伴っており、古墳時代中期には大集落を形成していたものとみられる(近藤2004)。現在整理作業中である。また、同じ台地上で6世紀後半の埴輪をもつ前方後円墳である吉野1号墳の調査が行われている(清藤他1988)。約50基からなる吉野古墳群に属するものである。



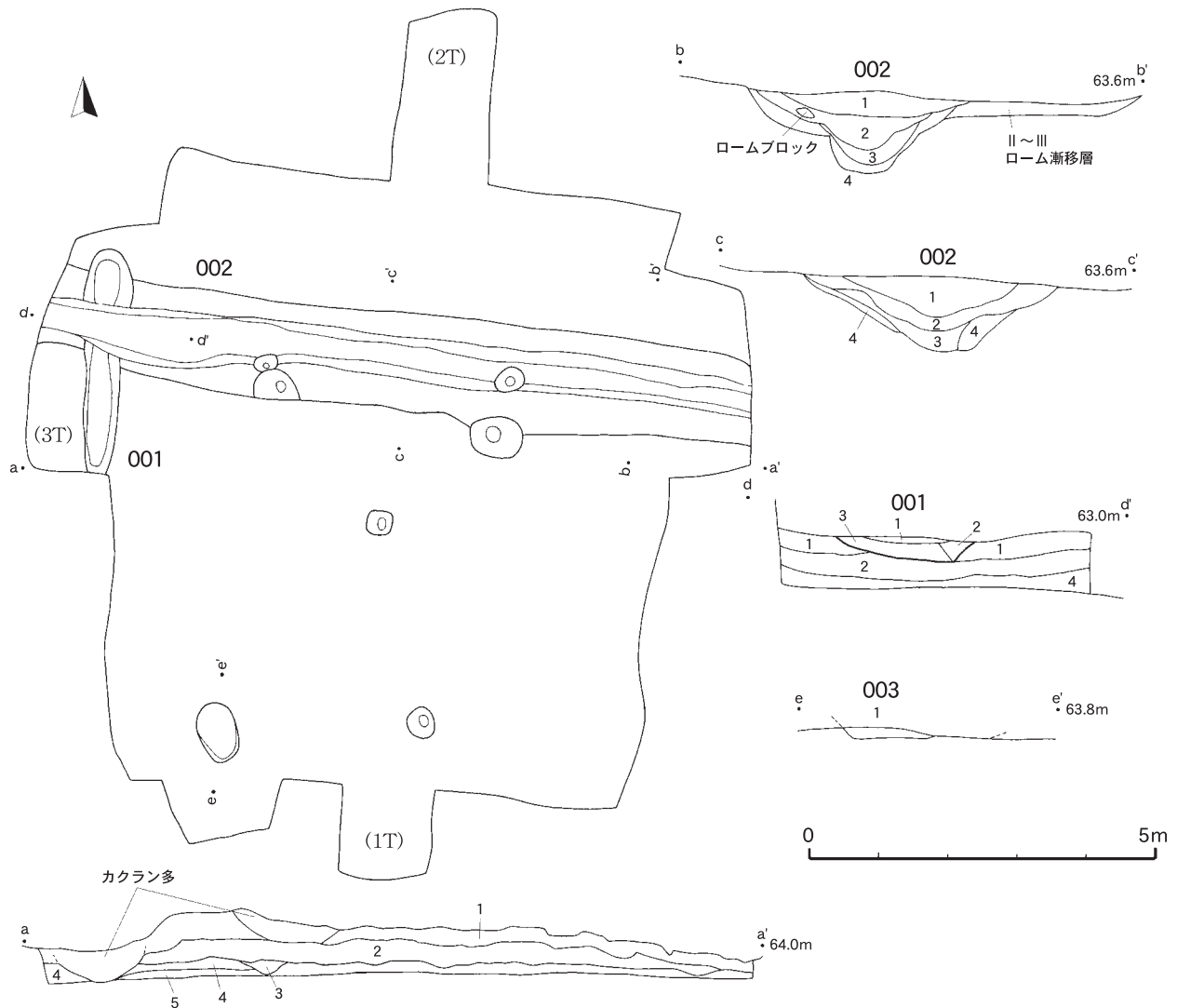
第7図 事業範囲と調査区
(1:500)



第8図 仲山遺跡と地形 (1:2,500)



第9図 北側調査区 (1:100)



第10図 南側調査区

(3) 調査の方法

事業範囲は、平成7年度に確認を行った対象範囲と一部重なっている。現地表面の土塁と溝については前回測量を実施しており、近世以降と推定されるため調査対象から除外した。調査は対象面積の約10%にあたる4本の確認トレンチを入れ、通路用の細長い部分以外については必要に応じて本調査を行うこととなっていた。確認調査を経て拡張を行ったのは2か所で、「北側調査区」、「南側調査区」と呼称することにしたい（第7図）。

2 調査の成果

(1) 遺構

001号溝（第10図，図版2）

002号と重複するごく浅い溝である。本遺構の方が新しい。検出規模は長さ3.2m，幅0.5m，深さ0.1mであり，南側の調査区外に続いている。本遺構の遺物として土器小片が取り上げられているが，位置と深さからみて，すべて002号に帰属するものであった。したがって，時期不明である。ごく新しい

可能性もある。

002号溝 (第10図, 図版2)

検出規模は長さ10.5m, 幅1.8m, 深さ0.5mであり, 東西の調査区外に連続している。壁の立ち上がりは緩やかで, 底幅は0.3mと狭い。壁の両側には不明瞭な段を有する。出土遺物は土器小片と礫4点のみである。弥生後期から古墳時代初頭の土器小片が19点, 土師器小片15点である。弥生土器には壺頸部片と, 口唇上に縄文原体圧痕をもつ甕1点があり, いずれも後期のものである。土師器は, 杯口縁部2点と台付杯の台~底部1点を含み, 平安時代が中心である。出土状況が明らかな土器は弥生~古墳初期のものが多く, 覆土下層から底面にやや集中するが, 平安時代のものも数点混じる。全体に小片のみであり, 詳細な時期を決定するには至らなかったが, 弥生時代から古代の溝の可能性はある。なお, 将来, 範囲外の調査によって時期が判明する可能性が残っている。

003号 (第10図)

0.8m×0.5m, 深さ5cmの窪みに木炭が集中していた。底は比較的平坦であり, 遺構として扱う。遺物は弥生土器小片2点のみである。時期・性格不明とせざるを得ない。

(2) 遺構外の遺物

確認トレンチと調査範囲内の表面採集遺物がある。なお, 2T・3Tでは出土遺物が皆無であった。

1T 弥生土器小片4点と磨石類1点がある。磨石類としたものは, 長さ124mm以上(欠損), 幅85mm, 厚さ54mmの円礫を使用したもので, ややざらつく周縁部以外の面に線状痕がみられ, 平滑化している。時期を特定することはできない。

4T 縄文施文の縄文土器小片2点と, 概ね平安時代とみられる土師器小片3点がある。

表面採集 縄文施文の縄文土器小片2点と, タタキ目をもる須恵器大甕の小片1点, 時期不明の無文土器小片2点が採集されている。

3. まとめ

3遺構を検出したが, 整理作業において時期を検討した結果いずれも時期不明となってしまった。しかし, 寺域内では弥生時代から古墳時代初頭の土器が数多くみられることから, この時期の墓域を伴う集落が存在し, その後中世以降の掘削・造成により大半が失われた可能性が高い。調査の成果は乏しいものであるが, 以上の点を追認することができた。また, わずかながら平安時代の土器が出土して, 遺跡の時期を延長する結果を得ることができた。

中世報恩寺や, 近世城館等に関わる遺構は, 現在の報恩寺の境内から北側に存在した可能性が高い。

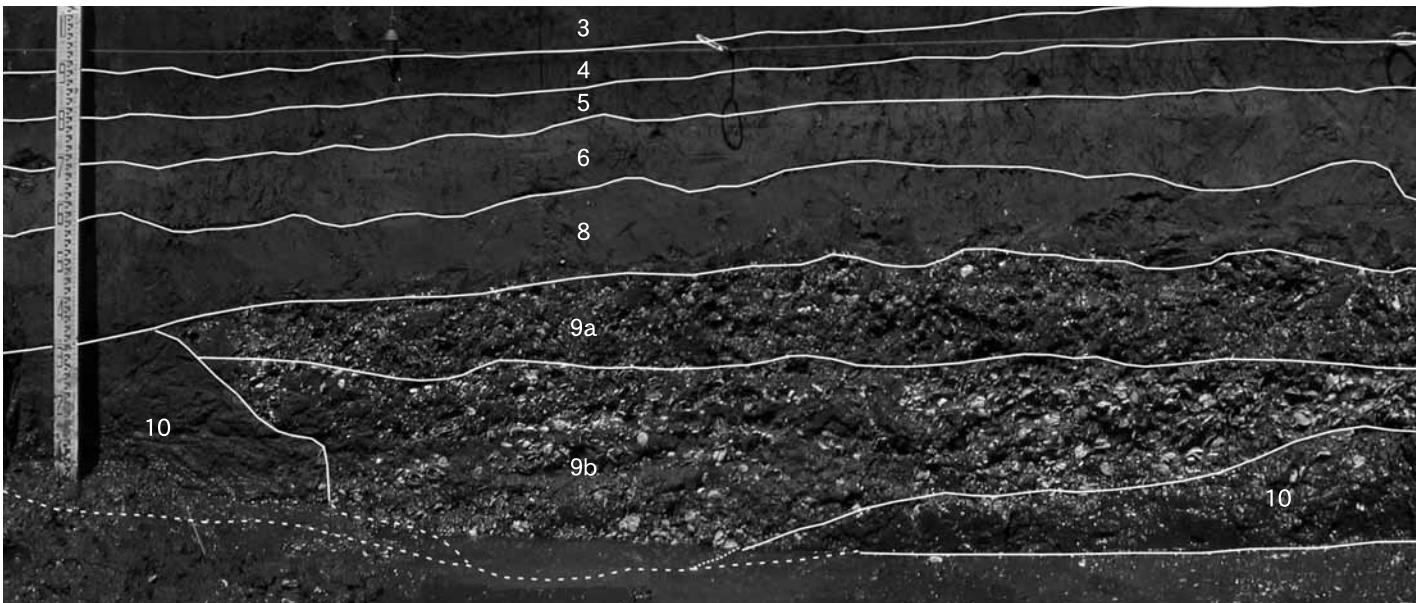
文 献

- 忍澤 成視 1991 「南岩崎多田良遺跡」『平成2年度 市原市内遺跡発掘調査報告書』 市原市教育委員会
近藤 敏 2004 「南岩崎遺跡(1次・2次調査)」 「南岩崎遺跡(3次調査)」『市原市文化財センター年報
平成13・14年度』
櫻井 敦史 1996 「南岩崎仲山遺跡」『平成7年度 市原市内遺跡発掘調査報告書』 市原市教育委員会
清藤一順他 1988 「吉野1号墳・南岩崎吉野遺跡」『平成2年度 市原市内遺跡発掘調査報告書』 市原市教育
委員会

写真図版

市原条里制遺跡

図版 1



貝層断面(e-a)



貝層コラムサンプル

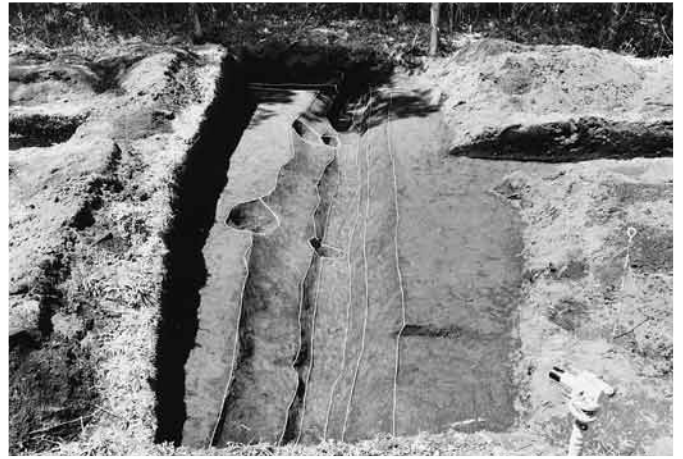


調査風景



仲山遺跡

南側調査区



001・002



北側調査区



市原条里制遺跡

上層調査終了, 貝層検出



加工木・竹



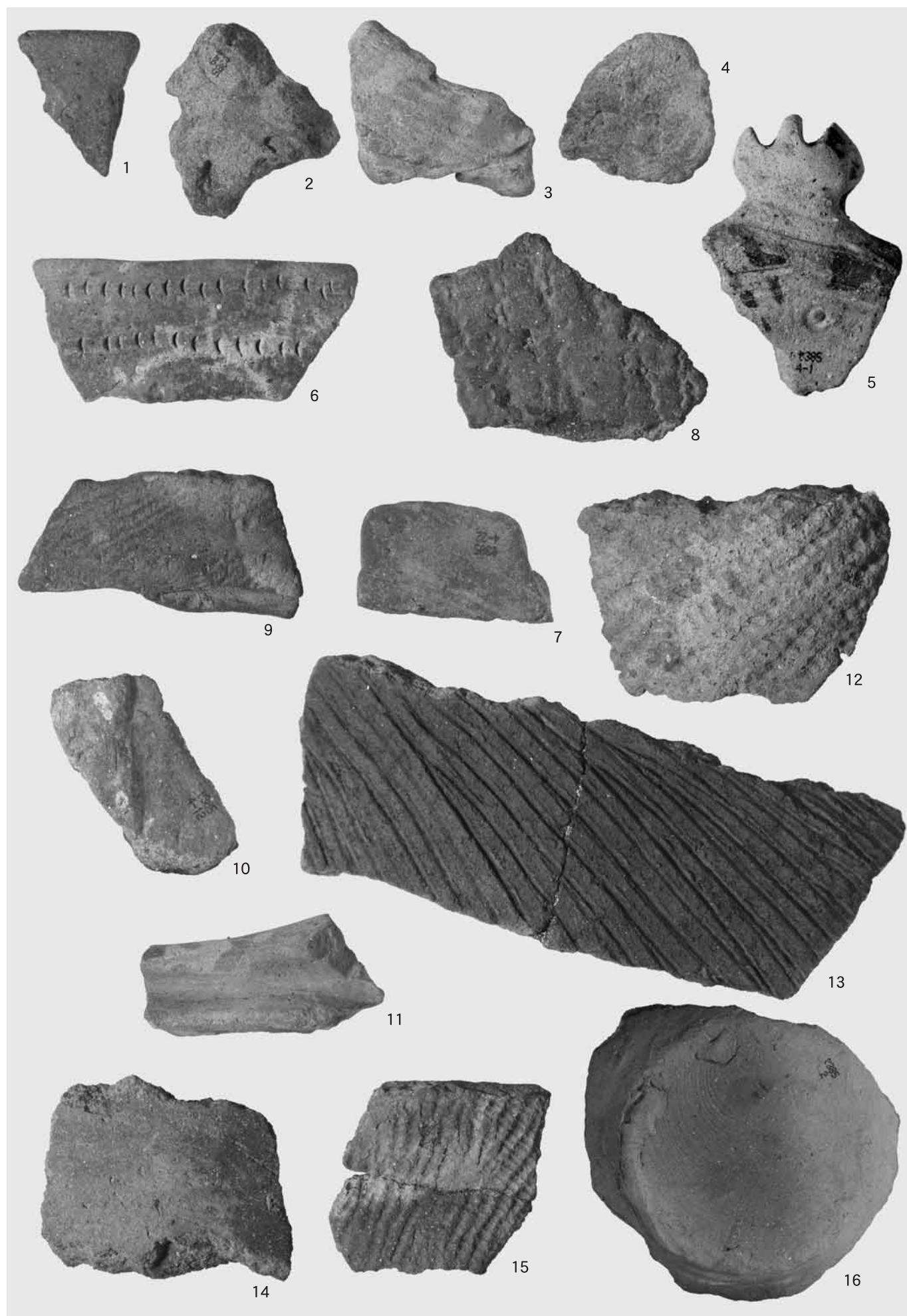
貝層調査状況



貝層a-b断面(1)

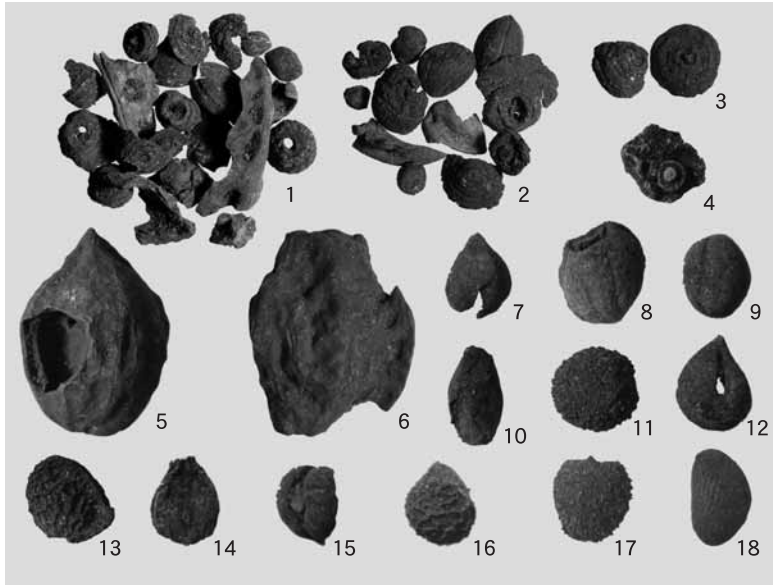


貝層a-b断面(2)



縄文土器・土師器

図版 4

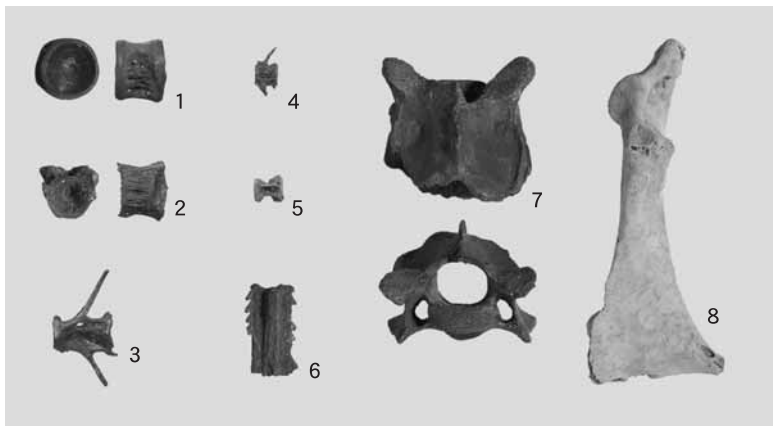


植物遺体

コラムサンプル検出

1～6 ほぼ実大 (10・4mm)

7～18 約3倍 (1mm)

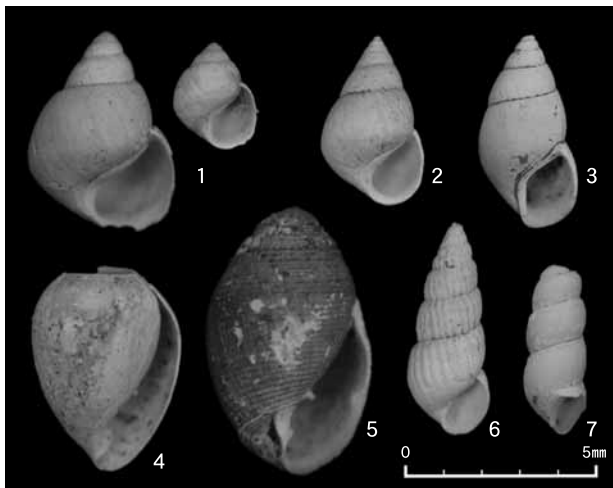


動物骨

コラムサンプル検出 1～7

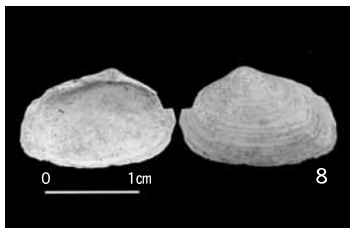
現地採取 8

- 1 エイ類椎体 (cut1)
- 2 キス属第1頸椎 (cut1)
- 3 アジ科尾椎 (cut2)
- 4 アユ尾椎 (cut2)
- 5 種不明腹椎 (cut2)
- 6 エイ類尾棘 (cut1)
- 7 タヌキ第5頸椎 (cut2)
- 8 カモ類鳥口骨L



貝類

- 1 カワザンショウガイ
 - 2 クリイロカワザンショウsp.
 - 3 ワカウラツボ
 - 4 キヌカツギハマシイノミ
 - 5 クリイロコミミ
 - 6 カゴメイトカケギリ類
 - 7 キュウシュウクビキレ
 - 8 スマコダキガイ
 - 9 クチバガイ
 - 10 ウミニナ類
- (左から10・4・2mm)



報告書抄録

ふりがな	いちほらしいちほらじょうりせいいせき（じゃぎきはっこくちく）・なかやまいせき							
書名	市原市市原条里制遺跡（蛇崎八石地区）・仲山遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	財団法人 市原市文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第91集							
編著者名	西野雅人							
編集機関	財団法人 市原市文化財センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1498 TEL 0436(41)7300							
発行年月日	2004年9月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いちほじょうりせい 市原条里制遺跡 （蛇崎八石地区）	いちほらしきくま 市原市菊間95- 4・95-5	12219	セ385	35度 31分 24秒	140度 07分 54秒	2004, 4, 6～ 2004, 4, 22	188	無線基地局建設
なかやま 仲山遺跡	いちほらしみなみいわさき 市原市南岩崎 686-9	12219	セ386	35度 24分 35秒	140度 06分 41秒	2004, 4, 19～ 2004, 4, 23	339	無線基地局建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
市原条里制遺跡 （蛇崎八石地区）	貝塚, 包蔵地	縄文時代	低地貝層, 泥炭層		縄文土器（早期後葉・前期後葉・中期中葉）, 鳥獣骨, 魚骨, 貝, 植物（クルミ, ドングリ）		縄文中期中葉の低地性貝層と泥炭層を検出した。	
	生産遺跡	弥生時代～奈良・平安時代	水田遺構（畦畔）？		土師器			
仲山遺跡	包蔵地	縄文時代・弥生時代・平安時代	なし		縄文土器, 弥生土器, 土師器			

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第91集

市原市市原条里制遺跡
（蛇崎八石地区）・仲山遺跡

平成16年9月17日 印刷

平成16年9月24日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 日本ユニシス株式会社
財団法人 市原市文化財センター
市原市能満1489 TEL 0436(41)7300

印刷 三陽工業株式会社
市原市五井5510-1番地